

家庭の日 作文コンクール

子どもが心豊かにすこやかに育つためには、家庭や家族のあり方が何より大切とされています。

青少年育成国民会議は昭和41年から、毎月第三日曜日を「家庭の日」とし、親子のふれあいや家族の団らんを推奨しています。

青少年育成鳥取市民会議でも、この「家庭の日」の普及促進を図るため、昭和57年から毎年、市内の小学校児童を対象に家庭や家族に関する作文のコンクールを行っています。今年度は、73点の応募がありました。

今回は、その中から最優秀賞に選ばれた作品を紹介します。

みんなの協力



泉本 遼 附属小学校5年

「痛いよ、足が痛いよ。」と、四才の妹が突然真夜中に火がついたように泣き叫んだのは、三年前の春のことでした。病院での検査の結果、妹は十万人に数人しかないと股関節の病気のため、最低二年間の療養が必要で、中学生くらいまでは運動ができないかもしれないと診

断されました。そして、その日以来、当時、二年生の兄と一年生のぼくの生活は一変してしまつたのです。

母は入院中の妹につきっきりで介護しなければならぬので、ぼく達の世話は父と近くに住む祖父母がしてくれました。母は喘息で通院しているぼくのことを心配し、毎日必ず祖母と付きそいを交代し、一時間だけ帰宅しました。帰宅後、母はお風呂に入り、ぼく達の次の日の学校に必要な物をそろえ、通信物に目を通し、体調の悪いぼくを近くの医院に連れて行くなど、これ以上にないほどに慌ただしく

『家庭の日』作文コンクール 入賞されたみなさん

【最優秀賞】「上下学年で1点」

「みんなの協力」 泉本 遼 (附属5年)

【優秀賞】

(下学年の部)

「みんなで力を合わせて」 川崎 愛実 (稲葉山2年)

「サイクリングして」 入川紀三代 (修立3年)

「はなちゃん」 木村 冴 (岩倉3年)

(上学年の部)

「家族について」 森田 崇夫 (遷喬6年)

「母は子ども会の会長さん」 谷角 佳祐 (日進6年)

「母と父は仲よし」 安田 綾 (日進6年)

【佳作】

(下学年の部)

「ふせうんどうこうえん」 高橋 勇貴 (醇風2年)

「家族っていいな」 森山 尚紀 (附属3年)

「わたしの家族」 田中杏沙美 (附属3年)

「お母さんのいなかった3日間」 福谷 春奈 (附属3年)

(上学年の部)

「お手伝い」 荒井 玲美 (附属3年)

「ぼくの家族」 小林 祐也 (遷喬4年)

「ぼくのおじいちゃん」 武庫山大貴 (岩倉4年)

「わが家の登山」 津村ほほえみ (岩倉4年)

「家族」 浮穴 香織 (日進5年)

「我が家のおきて」 中川 茜理 (附属5年)

「ぼくと母の暮らし」 相川 優太 (日進6年)

「家族ってあったかいね」 村上 汐里 (稲葉山6年)

過ごしました。朝は、ぼく達も父と一しょに家を出るので、学校に着くのが早過ぎて、玄関があくのを待つことが何度かありました。そんな生活が一月以上続いた後、妹は鳥取から神戸の病院に転院しました。神戸での検診の結果、妹は車椅子が必要となりましたが、神戸で生活するのではなく、鳥取から通院してよいことになりました。妹の世話を家族全員が協力しなければならぬのは大変なことです。ぼく達は心からほっとしました。夏と春の長い休みの期間

は、妹の通院にぼくと兄も付きそっていくことにしました。ぼく達も一しょにいることで妹を

はげましてやりたかったからです。

いつか、こんな出来事がありました。診察帰りに立ち寄ったデパートの駐車場で、階段の下まで車椅子の妹をおろそうとしたとき、どこからともなく数人の若い人達がやって来て、

「お手伝いします。」

と言つて、車椅子ごと妹を運んでくださったのです。そのさりげない行動を通して、震災にあって神戸の街の人達のお互いが助け合おうと言う気持ちがぼくにはつたわってきました。そのとき父がぼく達の方を見て、

「自分たちが受けた親切や優しさをいつまでも忘れず、この嬉しい気持ちをこれからずっと他の人にかえしていこう。」

と言いました。妹は、現在、完全に運動ができるまでとはいかないまでも回復し、ぼくと一しょに通学しています。そして、今では傷だらけになった妹の赤と黒のツートンカラーの車椅子は近くの幼稚園の方が使っています。

妹の病気がわかった日を思い出すと、今でも胸が痛くなりませんが、妹の病気を通して、家族一人一人がぼくにとってかけがえのない存在であり、みんなが支え合つて生活することの大切さを教わりました。だから、妹には「ありがとう。これから、妹がなづいていこうね。」という気持ちでいっぱいです。